

ダーウィニズムを超えて：新たな展望

日本統一思想研究院 大谷明史

I 生命の波動

1. 突然変異と自然選択が生物を造ったのか

ダーウィニズムの根本的主張は、突然変異と自然選択（自然淘汰）によって生物は進化したということである。突然変異はランダムな偶然的な変異であるが、それを自然選択がフィルターにかけながら新しい種を形成していくというのである。

ニューヨーク大学の生化学教授イタイ・ヤナイと、デュッセルドルフのハインリッヒ・ハイネ大学生物情報学教授マルティン・レルヒャー (Itai Yanai & Martin Lercher) は「自然選択のプロセスが、生物の世界のすべての奇跡を生み出したと言っても過言ではない」とまで言う。

そして著名な進化論者たちは自然選択をあたかも創造主のように考えたのであった。すなわち、自然選択について、ドブジャンスキーは作曲家、シンプソンは詩人、メイヤーは彫刻家、ハクスリーはシェークスピア、ドーキンスは遺伝子エンジニアにたとえたのであった²。これでは、まるで創造主と変わらないものである。はたして自然選択に創造主に代わるような創造性があるのだろうか？

2. 突然変異は同種内での変化にすぎない

突然変異と自然選択によって、新しい種が生まれるのであろうか。シカゴ大学の進化生物学教授であるジェリー・A・コイン (Jerry A. Coyne) は「突然変異は、すでに存在している特徴に生じる変化である。これがまったく新しい特徴を生み出すことはまずありえない³」と言う。では、実際には、自然選択はどれだけのことができるのであろうか？ そして次のように言う。

たしかに淘汰は鳥のくちばしや植物の開花時期を変えられるだろう。だが、これに複雑なものが構築できるのか？ 四足類の肢のような入り組んだ形質は？ 血液凝固のような、多くのタンパク質を絡めた一連の段階を正確に踏んでいかななくてはならない、

¹ イタイ・ヤナイ、マルティン・レルヒャー『遺伝子の社会』(*The Society of Genes*), 35。

² スティーヴン・グールド(Stephen J. Gould)、浦本昌紀・寺田鴻訳『ダーウィン以来』(*Ever Since Darwin*) 早川書房、1986年、上巻、59頁。

³ ジェリー・A・コイン『進化のなぜを解明する』(*Why Evolution Is True*), 45。

緻密で精巧な生化学的適応は？そして、これまで進化してきたもののなかで最も複雑な装置かもしれない、人間の脳は？⁴

ジェリー・A・コインは自然選択(淘汰)でこれらを説明するのは困難であって、「この点について、われわれ[進化論者]はいささかハンディキャップを抱えている」と認めながらも、「淘汰が本当に関わっていたかは確かめようがない。創造論者は、淘汰にできるのは生物に小さな変化をもたらすことだけで、大きな変化については無力だと言うが、それが誤りだとどうしてわかるだろう。だが、そもそも考えてみてほしい。これに対抗する別の仮説があるのだろうか？⁵」と、結局は、自然選択を認めるしかないと言い、さまざまな事例を挙げながら、創造論に対する進化論(自然選択説)の優位性を論証しようと試みているのである。

ダーウィンは、動物の育種を進化学説のモデルとした。しかしセント・アンセルムカレッジ教授(哲学、科学論)のロバート・オークローズと、科学論専攻のジョージ・スタンチュウ(Robert Augros & George Stanciu)が言うように、「育種実験で動物の新種が作りだされたことは、いまだかつてないのだ。したがってすべての進化的変化に漸進説を外挿するというダーウィンのやり方は、不確かな機構に基づくことになってしまっている⁶」のである。

ダーウィンは、同種内での変化にすぎない変異と、その中から適者を選ぶだけの自然選択を新たな種の誕生ということに結びつけて拡大解釈をしてしまったのである。したがって、ダーウィンに追従する進化論者が、自然選択で新たな種の誕生を説明しようとしても、それは不毛な試みでしかないのである。

3. ゲノム重複、遺伝子重複、遺伝子浮動は進化の原動力か？

突然変異と自然選択以外に進化の原動力はあるのだろうか。進化論者は、ゲノム重複、遺伝子重複、遺伝子浮動などを進化の推進力と見なしている。

① ゲノム重複

ゲノム重複による倍数体が種に劇的な進化をもたらし、新しい種を作ったという説がある。イタイ・ヤナイ、マルティン・レルヒャーは次のように述べている。

ゲノム重複は、人類だけに起きたわけではない。植物、菌類、魚類でも起きてきた。ゲノム重複は、遺伝子社会で時々起きる大幅な飛躍で、ダーウィンの「進化は漸進的だ」という主張と対立する。実のところ、漸進的な進化は、遺伝子社会の多くの変化

⁴ ジェリー・A・コイン『進化のなぜを解明する』240-41。

⁵ ジェリー・A・コイン『進化のなぜを解明する』241。

⁶ ロバート・オークローズ・ジョージ・スタンチュウ『新・進化論：自然淘汰では説明できない』(*The New Biology: Discovering the Wisdom in Nature*), 295。

の理由だったはずだが、劇的な変化をもたらしたのは、稀にしか起きないゲノム重複だったのだ⁷。

進化論者は大進化を説明するのに、ゲノム重複に大きな期待をかけている。しかし倍数体の実例として観察されたもの、あるいは人為的になされたものは、コムギの改良、キクの変種、種なしスイカなどであって、それらは到底大進化といえるものではなく、種の中の変種というべきものである。さらに倍数体は植物のみに見られるものであって、動物ではほとんど見られないのである⁸。

② 遺伝子重複

サイエンスライターのカール・ジンマー (Carl Zimmer) は遺伝子重複によって遺伝子が重複したおかげで、脊椎動物の祖先は、もっと複雑なボディープランを進化させはじめたと言う⁹。

ヒトゲノム・プロジェクトを牽引した、フランシス・コリンズ (Francis S. Collins) は、遺伝子の重複が進化の原動力になりうると言う。

遺伝子重複において、コピーされた遺伝子には機能がないために、制約なしに、ランダムな変異を取り入れて、時には、生物体に有意な新たな機能を得ることができるのであり、それが有意な自然選択となりうるのだと言う¹⁰。けれども、何も新たな遺伝子が加わったわけではなく、結局これも突然変異と自然選択が進化の原動力であるという主張と変わらないのである。

③ 遺伝子浮動

ランダムな遺伝的浮動が進化の原動力であるという主張もなされている¹¹。しかし遺伝的浮動と言っても、それは種の中の対立遺伝子の頻度の変化にすぎないのであり、それによって新しい種が形成されることにはなりえないのである。

4. 生命とは

生命の誕生について、無機物質からまず RNA が、次いで DNA が生まれ、それから核のない原核細胞が生まれ、それが核を有する真核細胞になり、やがて多細胞の生物が生まれたと考えられている。しかし無機物質から RNA、DNA が生まれるのは大きな謎になっている。

⁷ イタイ・ヤナイ、マルティン・レルヒャー『遺伝子の社会』206

⁸ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチャー『新・進化論：自然淘汰では説明できない』296。

⁹ カール・ジンマー『進化大全』(*Evolution: The Triumph of An Idea*),176。

¹⁰ Francis S. Collins, *The Language of God*, 189.

¹¹ ユージン・E・ハリス『ゲノム革命』110。

それでは生命とは何であろうか。ワシントン大学生物学教授のピーター・ウォードと、カリフォルニア工科大学の地球物理学記念教授のジョゼフ・カーシュヴィンク (Peter Ward & Joe Kirschvink) は、「生命とは、自律性を持ち、代謝し、複製するものである¹²⁾」と言う。ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュューは、「生命とは、自己運動する能力¹³⁾」、「生物自身の内部に潜む能力¹⁴⁾」と言い、発生生物学者のポール・ワイス (Paul Weiss) は、「生命システムでも行動していないものは死んでいる。生命とは過程であって物質ではないのだ¹⁵⁾」と述べている。

そのような生命観は物質の次元を超えるものである。したがって生命は、物質以外の次元からの作用として認めなくてはならない。それは自然界に働いている、生命の波動によるものなのである。

元イエール大学の解剖学教授であったハロルド・サクストン・バー (Harold Saxton Burr) は、ライフ・フィールドが生物を導いていると言う¹⁶⁾。ライフ・フィールドとは、全ての生物がその輪郭に沿って成長する不可視の電気力場であり、菌類、植物、動物を問わず、生命を持つものはみな、この永遠の青写真の設計のもとに生まれ、形づくられてゆく。そして常に、宇宙のかなたから発信されるさまざまなメッセージを受信し、その影響の波動はたちまちのうちに全地球を覆っているという。

イギリスの生物学者のルパート・シェルドレイク (Rupert Sheldrake) は形態形成場、モルフォジェネティック・フィールド (Morphogenetic Field) 説を提示している。すなわち生物の形態を形成する場が生物の背後に作用しているという主張である。

生命には自律性があり、自己運動力、自己組織力があるが、それは細胞の DNA に組み込まれた設計図に基づいた形成力でもあるのである。統一思想においては、生命は宇宙意識が生物体に宿ったものであると見る。ハロルド・サクストン・バーやルパート・シェルドレイクの見解は統一思想と軌を一にするものであると言える。なお、生物界全体に作用している生命の波動には、神の言であるロゴスが宿っており、すべての生物の設計図が含まれているが、個々の生物に宿った生命はその個体の設計図のみを感知していて、その設計図に従って作用しているのである。

5. 神の言 (ロゴス) による創造

¹²⁾ ピーター・ウォード、ジョゼフ・カーシュヴィンク 『生物はなぜ誕生したのか』 80。

¹³⁾ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュュー 『新・進化論：自然淘汰では説明できない』 56。

¹⁴⁾ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュュー 『新・進化論：自然淘汰では説明できない』 309。

¹⁵⁾ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュュー 『新・進化論：自然淘汰では説明できない』 51-52。

¹⁶⁾ Harold Saxton Burr, *Science of Life Field*.

ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュューは、生命のない物質から自然発生的に生命ある生物が生まれるはずはなく、遺伝暗号を与えて、動物や植物の種をつくるようにせしめたのは、物質以外のもの、すなわち心的なものでなくてはならないと言い、そこには芸術家としての神のみわざをみとめるべきであると言う。

遺伝暗号を起源させ、動物や植物の種をつくるよう命令させたのは、いかなる原因なのだろうか。その原因が物質にあるはずはない。……ポセイドン像の形は、まず最初に芸術家の心の中で起源し、次いで何らかの適切なしかたで徐々に物質的な形をなしていく。芸術家の心こそが、たとえその人が像を制作する機械を発明する場合でも、その形態が物質に存在することの究極因なのである。それと同じことで、物質に生物の形態をとるよう指令する心が存在するにちがいない。たとえそれが、自律性を発揮してその仕事をこなすような化学機構を創造することでそうしているとしても、その形態が物質の形で存在することの究極因はその芸術家ということになる。その芸術家がいうなれば神であり、自然は神の手仕事ともいえる。聖なる芸術、すなわち自然は、人間のどんな芸術よりも奥が深く、しかも強力である。なぜなら、そこには物事の本質が組み込まれているからである¹⁷。

ノーベル生理学・医学賞を受賞した、医師のアレキシス・カレル (Alexis Carrel) は「全ての存在に内在しつつ超越する存在」としての精神、そしてその背後にある神について語っている。

生命としての人間は、物理的連続体の中に完全に包括されているのではない。人間は物質と同時に精神から成っている。そして精神は、我われの器官の中に棲みつつも時間と空間の四次元の外にはみ出している。我われは宇宙と同時に、触れることのできない、非物質的な見えない環境、我われの意識に似た性質の環境にも棲んでいると信じるのが許されるのではないだろうか？……この環境こそ、全ての存在に内在しつつ超越する存在、我われが神と呼ぶ存在にほかならないのではないだろうか¹⁸。

文鮮明師によれば、種が第一の存在から第二の存在に飛躍するためには、第三の力が必要である。第三の力とは、神から来る新たなデザイン（設計図）の注入である。文師は次のように述べている。

創造か、進化か？第一の存在から第二の存在になるには、第三の力を関与しないと行けない。生物自体には、力を増加させながら、第二のものになるような力を創造するものがない。より

¹⁷ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュュー『新・進化論：自然淘汰では説明できない』318-19。

¹⁸ 望月清文『素粒子の心、細胞の心、アリの心』171-72。

高いものに発展していくにはそれに相応した第三の力が関与しなくてはならない。それから複雑な構造は、内的な目的概念と外的な力の作用を入れなければ答えようがない¹⁹。

文師は、宇宙的な力が生物の核を変化させるとも述べている。

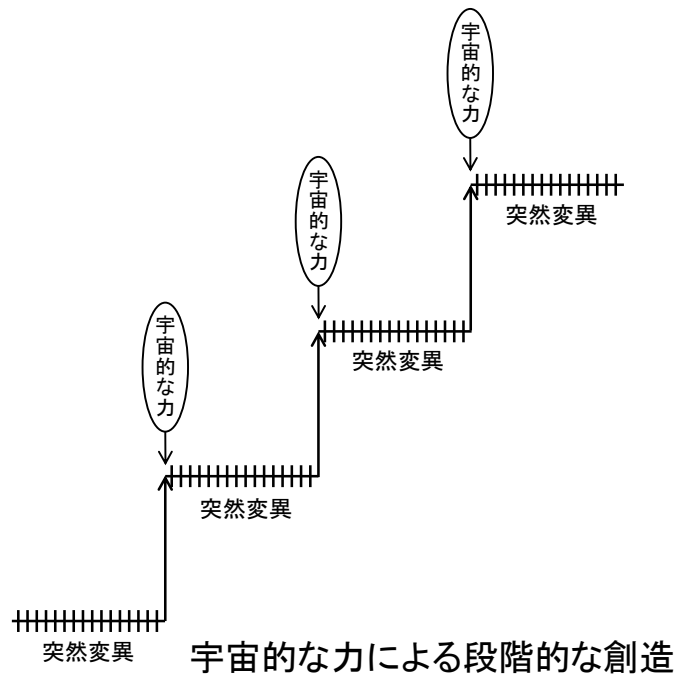
進化するために必要な力がどこから補充されなければならないが、進化論を主張しようとするれば、それを自体内に求めなければならない。しかし、核の形態の変化を自己自体に起こしてから連合させることのできる自体内の力はある得ないので、進化論で言うところの進化は不可能だという結論が出てくる。……すべての存在の内的作用の力を起すことのできる宇宙的な力があるということを知った上で考えなければならない²⁰。

宇宙的な力とは、神からくる創造的な力である。宇宙的な力が及んで生物の核を変化させるということであるが、それは科学者のいう遺伝子の組み換えに相当する。すなわち、神が遺伝子を組み換えながら、新しい種を創造されたということである。

進化論者の言う突然変異は、種の中での微小な変化にすぎないのであり、それをいくら自然が選択したとしても、新たな種に飛躍することはできない。新たな種に飛躍するためには、外部から来る、生命の波動としての宇宙的な力が必要なのである。

¹⁹ 文鮮明「アラスカでのみ言」1989.8.27

²⁰ 文鮮明『ファミリー』1982年6月号、11頁。



II. 自然選択からデザインへ

ダーウィンは、『種の起源』の中の、「変異の法則」の章で、「これまでときどき私は、変異が……偶然によって生じるものであるかのごとく語ってきた。もちろんこれはまったく不正確な表現なのだが、個別の変異が生じる原因について私たちがまったく何も知らないということを率直に認めるうえでは役に立つであろう」と述べている。

そのようにダーウィンは、種の変異（進化）が何によってもたらされるか、何も知らないと告白していたのであった。それにもかかわらず、彼は、神に由来するデザインを否定し、盲目的で、意識のない、自然選択（自然淘汰）というプロセスによって、種は進化したと結論したのであった。

1. 遺伝子ネットワークによる進化

しかし、今や、進化論者たちも、自然選択は適者を選択するだけで、新しい形質を創造するものではないことに気づきつつある。スイス・チューリッヒ大学の進化生物学・環境研究所教授のアンドレアス・ワグナー(Andreas Wagner)もその一人である。

ワグナーは、「[自然淘汰は]すでにあるものを選別するだけだ。ダーウィンは自然淘汰が新機軸をひるめることができるのに気づいたが、そもそもそうした新機軸がどこからやってくるのかは知らなかった²¹⁾」と言う。

²¹⁾ アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』(Arrival of the Fittest: Solving Evolution's

ワグナーによれば、「生物は新機軸（イノベーション）を生み出すことができる。イノベーション能をもっているのだ。それだけでなく、生物は忠実な遺伝を維持しつつながら、新機軸を生み出すことができる²²」と言う。

生命の代謝、タンパク質、遺伝子の発現調節回路において、可能な組み合わせ——イノベーションの潜在的な候補者——の数は、天文学的な膨大さであり、それをワグナーは超天文学的な蔵書を誇る万有図書館と言う²³。この万有図書館は、生物学的な図書館ではなくて、数学的な概念の図書館である。

こうした図書館とそのテキストは、解剖学者が切り分け、私たちが素手で触ることができる筋肉、神経、結合組織とは根本的に異なっている。顕微鏡を通して見ることができる細胞小器官やX線結晶回折で明らかにされるDNAの構造とさえ似ていない。それらは概念、数学的な概念であって、心の眼をもってしか見ることができないものである²⁴。

この図書館には天文学的な膨大さのイノベーションの潜在的な候補の数がおり、例えば、万有タンパク質図書館においては、100個のアミノ酸から 10^{130} のタンパク質の可能性があると²⁵。では、そのような天文学的な組み合わせの中から、どうやって、有意な生物の変異が選ばれたのであろうか。ワグナーは、遺伝子型ネットワークによるものであると言う。遺伝子型ネットワークとは、「同じ意味を持つテキストをつないでいる隣接した通路のネットワーク²⁶」であると言う。そして遺伝子型ネットワークこそ、私たちが知っているような生命をつくりだした、さまざまな種類の新機軸(イノベーション)——代謝、調節、および高分子における——の共通の起源であると言う²⁷。

それでは、無数のテキストの中から、いかにして遺伝子型ネットワークが形成されたと言うのであろうか？ ワグナーによれば、遺伝子型ネットワークの形成は「ランダム・ウォーク²⁸」であり、「盲目的に集団で手探りする進化的な旅²⁹」であり、「見えざる手が握っている、特別な種類の自己組織化³⁰」である。そして「新機軸の核心にあるのは遺伝子型ネットワークの自己組織化する多次元的な織物であり、……生命の隠れたアーキテクチャなのである³¹」と言う。

さらに遺伝子型ネットワークは「広大なプラトンの王国」に住むという³²。そして「目に見える

Greatest Puzzle), 24。

²² アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』25。

²³ アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』122。

²⁴ アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』293

²⁵ アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』158。

²⁶ アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』136。

²⁷ アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』292。

²⁸ アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』130

²⁹ アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』167。

³⁰ アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』228。

³¹ アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』261。

³² アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』171。

世界の下に隠れている基本的原理は、……「プラトンの洞窟の影³³」のようなものであると言う。プラトンの王国とは、アイデアの世界、すなわちロゴスの世界である。したがってワグナーの言う遺伝子型ネットワークとは、ロゴスの世界を、手探りしながら、自己組織化によって、形成されるものということである。

ワグナーはイノベーションの潜在的な可能性が天文学的な膨大さであることを示したが、その中からいかにして最適な遺伝子型ネットワークが形成されるのか、盲目的に手探りするだけと言うだけで、明らかにすることはできなかった。ワグナー自身、「進化がどのようにしてある仕事に最適な発現コードを見つけるかは説明できない³⁴」と述べているのである。

盲目的な手探りによって完成した生物を目指すのは不可能である。生物の完成した設計図を目指して、シナリオに従って、生命の代謝、タンパク質の合成、遺伝子の発現がなされていると見るべきである。しかしながらワグナーが、盲目的な探究であるとは言え、物質世界を超えて、プラトンの世界に足を踏み入れたのは、ロゴスに基づいた創造論へと一歩前進したと言えよう。

2. ホックス遺伝子

人間の DNA 配列の 98.5 パーセントはチンパンジーと共有しており（ジェリー・A・コイン『進化のなぜを解明する』337）、しかも、両者は同じオペレータ、またはマネジャーとしての遺伝子——ホックス遺伝子——を持っていることが知られている。

ハエの触覚が脚になったりするなどという、昆虫の付属構造の異常をホメオシスというが、それに関係している遺伝子がホメオティック遺伝子である。そして各種のホメオティック遺伝子は、ホメオボックスという共通の塩基配列を持つことがわかってきた。ホメオボックスは、発生途中で生物の成長パターンをコントロールする遺伝子であると考えられている。ホメオボックスをもつ一連の遺伝子はホックス遺伝子（HOX 遺伝子）と呼ばれる。

イタイ・ヤナイ、マルティン・レルヒャーによれば、「HOX 遺伝子は人間をはじめ、多くの動物の身体を作る作業を統括するマネジャー³⁵」であり、「HOX 遺伝子は発生の段階で、どこの遺伝子をいつオンにするかをコントロールして、その体を作っていく³⁶」のであり、ホックスファミリーは「遺伝子社会の最高経営者」である³⁷。サイエンスライターのカール・ジンマーも「ホックス遺伝子は、他の遺伝子のスイッチをコントロールする大元のスイッチ（マスター調節遺伝子）として影響力を行使する³⁸」と言う。

それでは人間とチンパンジーや他の動物を区別するものは何であろうか。マネジャーであるホックス遺伝子の出す指令がそれぞれ異なるからだ、つまり、ホックス遺伝子をコントロールして

³³ アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』289。

³⁴ アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』214。

³⁵ イタイ・ヤナイ、マルティン・レルヒャー『遺伝子の社会』9。

³⁶ イタイ・ヤナイ、マルティン・レルヒャー『遺伝子の世界』205。

³⁷ イタイ・ヤナイ、マルティン・レルヒャー『遺伝子の社会』205。

³⁸ カール・ジンマー『進化大全』168。

いる存在があるというのである。

そもそも、遺伝子のスイッチであり、マネージャーであるホックス遺伝子はいかにして生じたのであろうか。さらにホックス遺伝子という調節因子をコントロールしているのは何であろうか。ワグナーは「何が、調節因子を調節するのだろうか？答えは単純で、さらに多くの調節因子である³⁹⁾」と言う。進化発生生物学（エボデボ）のリーダーであるショーン・B・キャロル（Sean B. Carroll）も、遺伝子のスイッチをオンにしたり、オフにしたりするのも、また遺伝子スイッチであるという⁴⁰⁾。これでは原因の先送りであり、真の解明ではない。結局、ホックス遺伝子がいかにして生じたのか、そしてホックス遺伝子をコントロールしているものは何なのか、不問のままになっているのである。

ここにホックス遺伝子を生じせしめ、ホックス遺伝子をコントロールしている、宇宙意識に由来する生命の波動を認めなくてはならない。生命の波動はロゴスを伴っているのであり、そこには設計図すなわちデザインが含まれているのである。

3. エピジェネティクス(Epigenetics)

エピジェネティクスについて、武村政春は次のように説明している。

DNA は、受精卵から発生が始まったのち、後成的なしくみによって、細胞ごとにいろいろな姿へと変化していく。体型や顔かたち、性格などに違いを生じたりするのは、細胞によって、個体によって異なる方法で付け加えられるからなのである。このしくみを研究する学問、そしてそのしくみそのものを「エピジェネティクス」と呼ぶのである⁴¹⁾。

エピジェネティクスに関与しているのは、「ヒストンのアセチル化(histone acetylation)やDNAのメチル化(DNA methylation)」と「ノン・コーディング RNA (non-coding RNA)」であり、どちらも遺伝子発現をコントロールしているのであるが、その“やり方”が違うし、またどのレベルでコントロールしているかも違うのだという⁴²⁾。

エピジェネティクスも、盲目的なものでありえない。ホックス遺伝子と同様、生命の波動、そしてロゴスによってコントロールされているのである。

4. 生物種の爆発的な出現の謎

ダーウィンは、「自然淘汰は、日々刻々と世界中でわずかな変異を精査している」と言

³⁹⁾ アンドレアス・ワグナー『進化の謎を数学で解く』196。

⁴⁰⁾ ショーン・B・キャロル、渡辺政隆・経塚淳子訳『シマウマの縞、蝶の模様』光文社、2007年、150。

⁴¹⁾ 武村政春『DNAを操る分子たち』32-33。

⁴²⁾ 武村政春『DNAを操る分子たち』152-3。

って、種は徐々にゆっくりと進化するという、漸進的進化論を主張した。ところが生物は徐々にゆっくりと進化したのではなく、ある時期に、突然、爆発的に出現したのであり、ダーウィンの漸進説とは異なっているのである。ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチャーは次のように説明している。

カンブリア紀には、さまざまな種類の無脊椎動物が、突如として、それも完成されたかたちでたくさん出現した。オルドビス紀には、中間段階を経た証拠もないままに、さまざまな種類の魚がたくさん出現している。白亜紀には、顕花植物が唐突に出現している。この場合も、それ以前に出現していた種類から起源したという手がかりは残されていない。しかも、最古の化石でさえ、すでに驚くほど多様化しているのである。……そのような放散に見られる典型的な様相は、ダーウィニズム流の漸進論とは好対照をなしている。ダーウィン自身はそのことをよく認識し、顕花植物の突然の出現と早々の多様化を「いまましい謎」と呼んでいた。ダーウィンはまた、カンブリア紀における無脊椎動物の瞬時としか思えない多様化は、自分の説では説明できないことを認めていた⁴³。

特に、カンブリア紀の爆発に関しては、その生命の「爆発」はなぜ起こったのか、そして、そのわずか数百万年のあいだに多くの新しい種類の動物が現れたのはどうしてなのか、と大きな謎になっている。

5. 統一思想の見解

以上の事柄に対して、神によるデザイン（設計図）に基づいた創造であるという統一思想の立場から、次のように解釈できる。

① カンブリア紀の爆発において、複雑な構造を持つ大型動物の体を構築するために必要な遺伝子のすべての部品——遺伝子の工具箱——が出来上がっていた。（望月清文『素粒子の心、細胞の心、アリの心』271）。すなわち、準備されていたのである。

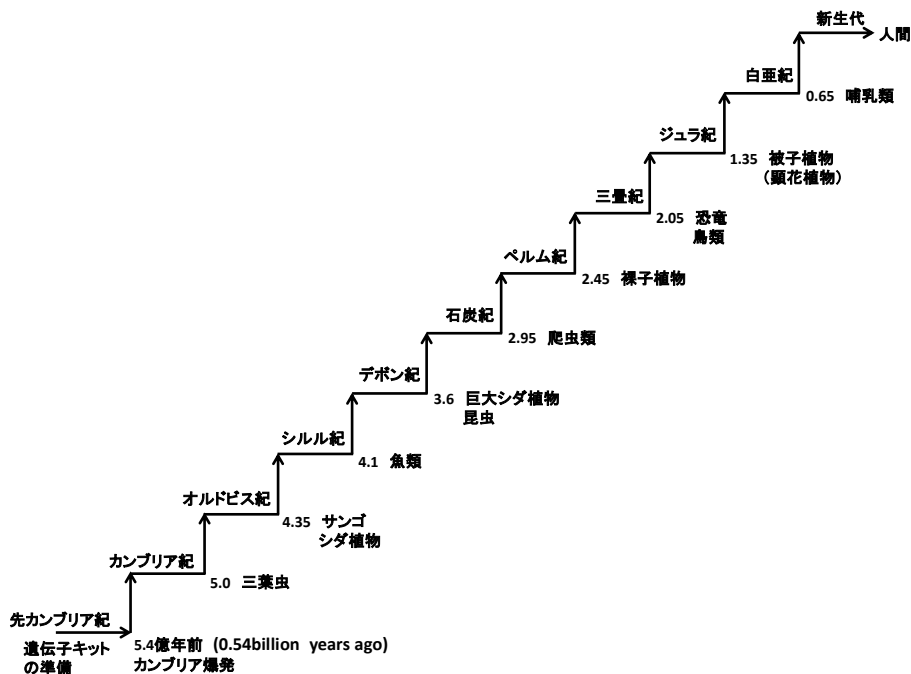
② そして次に、これらの遺伝子の部品を組み立てるオペレーター、あるいはマネージャーとしてのホックス遺伝子が準備されたのである。そしてホックス遺伝子をコントロールしながら、種類に従って、次第に高次の生物が創造されたのであった。

③ さらに「エピジェネティクス」によって、細胞と、個体に、それぞれ個性が与え

⁴³ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチャー『新・進化論：自然淘汰では説明できない』291-92。

られたのである。

これら、遺伝子の部品の準備、オペレーターとしてのホックス遺伝子の準備、個性化のためのエピジェネティクスは、突然変異と自然選択による進化を証明するものではなく、ロゴスの作用の下で、段階的に、人間という目標を目指して、単純なものから高級なものへと創造がなされたことを示すものである。その際、一つの段階が整うのに一定の期間が必要であり、その段階が出来上がれば、次の段階の創造がなされるというようにして、創造は段階的になされたのである。それが、次の図に示すような、地質時代の区分と生物の登場に現れているのである。



アウグスティヌスは、神の創造は、短期間に、それぞれ独立的になされたのではなく、一定のシナリオに基づいて、互いに関係をもちながらなされたと見ている。そして創造は進化的発展であると言うのであり、統一思想の段階的創造論に通じていると言えよう。

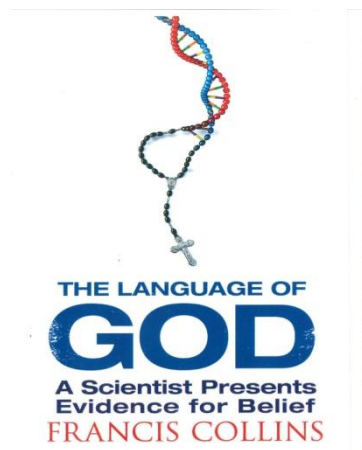
五世紀の偉大な神学者であるアウグスティヌスは、『創世記』をもとに、はじまりにおいて神はすべての生きものを創造したが、それは実際に個々の生きものをただちに創造したわけではなく、「将来においてそういう形をとるよう、その原因の中で潜在的に」創造したのだと主張した。自ら根本原理と呼んだ進化的発展を解説するなかで、アウグスティヌスは、右のようなかたちで、自然界の因果性と創造主の因果性の両方

を擁護した⁴⁴。

④ DNA の遺伝暗号は神の言（ロゴス）が組み込まれたものであり、細胞同士もロゴスにしたがっている。

ヒトゲノムプロジェクトのリーダーであり、ゲノム研究の第一人者と呼ばれている、フランス・S・コリンズは、進化論者でありながら、*The Language of God* という本を著し、DNA の遺伝暗号を神の言葉であると証言している。

日本で発行されている科学雑誌『ニュートン』（200年7月号）では、DNA の遺伝暗号は、神の設計図であるという、表紙が掲げられた。



iPS 細胞の発見により、2012 年のノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥教授は、「細胞は、意志と戦略をもっている。細胞同士が緊密に情報交換をしている。従って細胞や DNA は神様にしか造れない」と語っている⁴⁵。

今日、依然として進化論を信奉する科学者が多いのも事実であるが、一方で、神の言葉によって生物は創造されたことを受け入れる科学者も台頭してきているのである。

Ⅲ 人間の創造

(1) ヒトとチンパンジーのゲノムの差異

⁴⁴ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチャー『新・進化論：自然淘汰では説明できない』386

⁴⁵ NHK スペシャル「人体 ミクロの大冒険」2014.3.29。

1. ヒトとチンパンジーの DNA 配列

DNA 配列とタンパク質配列から導かれる分子データによれば、ヒトとチンパンジーが DNA 配列の 98.5 パーセントをと共有していることが明らかになっている。そしてヒトと最も近い類縁はチンパンジーであり、その共通祖先からヒトが分岐したのが約 700 万年前であるという。

2. ヒトをヒトにした特定の遺伝子はあるのか

ヒトとチンパンジーの遺伝子はほとんど似ているのであるが、進化生物学者はヒトをヒトにした人間独自の遺伝子を探求しようとしている。

ニューヨーク州立大学クイーンズバラ・コミュニティ・カレッジ生物学教授のユージン・E・ハリス(Eugene E. Harris)は、ゲノムスキャン研究によって、ヒトをヒトたらしめている未知の特徴を暴くことができるのではないかと言う⁴⁶。そして、「ゲノム時代の到来によって、ヒトは何者であってどのようにしてヒトになったのかという長年の疑問の答により近づくと同時に、地球上のほかの生物との進化的な結びつきの解明にもつながるだろう⁴⁷」と期待している。

チンパンジーをヒトに進化せしめた遺伝子は **FOXP2** 遺伝子かもしれないという説がある。エモリー大学の進化神経科学者のトッド・M・プロイス (Todd M. Preuss) は、次のように提唱している。

FOXP2 はきわめて特有の役割を果たしており、たとえば、一連の遺伝子を統制して、脳の発達を祖先のプログラムからヒトのプログラムへと切り替え、細胞や神経連結を、発話や言語を支えるシステムへと分化させているのかもしれない。さらには、肺や喉頭など、音声生成に関わるほかの解剖学的部位の発達も制御しているのかもしれない⁴⁸。

けれども **FOXP2** 遺伝子が、ヒトをヒトにした特定の遺伝子なのか、実際は何もわかっていないのである。ジェリー・A・コインも次のように言う。

ヒトをヒトにした特定の遺伝子については何もわかっていないのか? いまのところ、わかっていることは大してない。……ヒトの発話の出現に関わっていたかもしれない遺伝子 (**FOXP2**) などが考えられるが、決定的な証拠はない。そして、これからもずっとそうかもしれない⁴⁹。

⁴⁶ ユージン・E・ハリス『ゲノム革命』 *Ancestors in Our Genome*146。

⁴⁷ ユージン・E・ハリス『ゲノム革命』 183。

⁴⁸ ユージン・E・ハリス『ゲノム革命』 177。

⁴⁹ ジェリー・A・コイン『進化のなぜを解明する』 365-66。

(2)痕跡器官、偽遺伝子、相似性は進化の証拠か

1. 痕跡器官、隔世遺伝

進化論では、祖先の時代には働いていたものが、進化の過程で働きを失い、退化したと考えられる器官を痕跡器官と言う。そして退化も進化の一つのプロセスと見ている。たとえば進化論者は、人間の背骨の下に、「尾てい骨」があるのは、昔、猿のように尻尾があった名残だと言う。また人間の耳に「動耳かく筋」があるのは、昔、うさぎのように、耳を動かしていた名残だと言う。虫垂についても、その本来の機能が分からないとしても、痕跡であることには変わりないと言う。隔世遺伝について、ジェリー・A・コインは次のように述べている。

ときおり、ある個体に祖先の形質の再現のような変則的な特徴が不意に現れることがある。……ヒトの赤ん坊に尾がついていたりするのだ。このような散発的に表出する祖先の特徴の名残を「隔世遺伝」、または「先祖がえり」(atavism)という。……このような隔世遺伝はなぜ起こるのだろうか。いまのところ最も考えられそうなのは、祖先においては機能していた遺伝子が、ある時点で必要とされなくなって自然淘汰により沈黙させられていたのだが、のちにふたたび発現したことによって起こるといふ仮説である⁵⁰。

ダーウィンも、「人間には数々の気高い資質がある。……それでも人間はその身体の構造に、消すことのできない刻印を抱えている。自らの下等な起源を示す刻印を⁵¹」と述べていたのであった。

2. ゲノムへの痕跡

ユージン・E・ハリスは、「ヒトがすべての大型類人猿とゲノムでつながっているという圧倒的な証拠が見て取れる。この進化の連続性は、現世大型類人猿のゲノムにランダムに振り分けられるというプロセスによって生じた。ヒトゲノムの中には、内なるチンパンジーだけでなく、内なるボノボ、ゴリラ、オランウータンも見て取れるのだ！⁵²」と言う。

イタイ・ヤナイ、マルティン・レルヒャーは、「現代ヨーロッパ人では、ネアンデルタール人のアレルを持つ可能性はおおよそ 50 パーセントだ。……現代ヨーロッパ人は半分がネアンデルタール人というわけではないが、その免疫系の重要な部分は、ありがたいことにネアンデルタール人由来の特質を備えている⁵³」と言う。

3. 死んだ遺伝子 (偽遺伝子)

⁵⁰ ジェリー・A・コイン『進化のなぜを解明する』124-25。

⁵¹ ジェリー・A・コイン『進化のなぜを解明する』379。240

⁵² ユージン・E・ハリス『ゲノム革命』72。

⁵³ イタイ・ヤナイ、マルティン・レルヒャー『遺伝子の社会』169。

遺伝子が有効に機能していない場合、その遺伝子は「偽遺伝子」と呼ばれる。たとえばヒトの場合は、約三万個の遺伝子のうち、2000 個以上が偽遺伝子であり、まさに死んだ遺伝子であると言う。ジェリー・A・コインは「われわれがこれだけ多くの不活性化した遺伝子を持っているということ自体、進化のさらなる証拠である⁵⁴」というのである。

4. 発生反復説

脊椎動物の胚を比較すると、発生初期はどれもよく似ていて、鰓裂（えらあな）や尾をもつほか、心臓などもすべて一心房一心室の時期を経過する。進化論者はこれを、動物は個体発生の過程において、進化の道筋をたどりながら、過去から現在までの過程を再現しているのだと主張している。

5. 統一思想の見解

統一思想によれば、創造は①ロゴスの形成、②被造世界の創造という、二段構造でなされたのである。

① ロゴスの形成

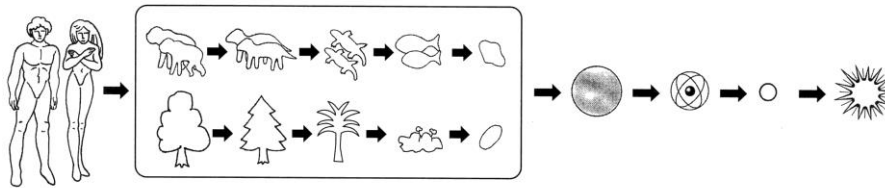
神は初めにロゴスを形成された。すなわち、天地創造のシナリオを描かれたのである。その際、神は人間アダム・エバの姿を思い浮かべながら、アダム・エバの姿をモデル（標本）にして、それを捨象（単純化）しながら動物、植物を構想された。その際、高級なものから低級なものへという順序で構想された。次に天体、原子、素粒子、光という順序でシナリオが描かれたのである。つまり人間をモデルにして、下向きに構想がなされたのである。

② 被造世界の創造

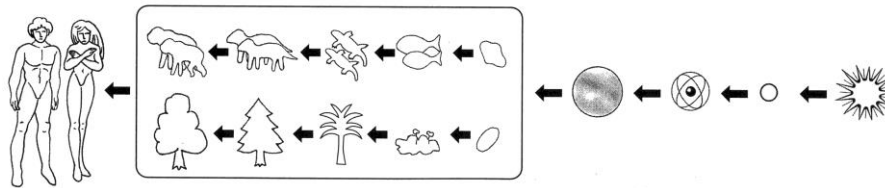
天地創造のシナリオ（ロゴス）の形成に続いて、シナリオに従って、実際の創造がなされた。「光あれ」という言に続いて、「光があった」、すなわちビッグバンが起きたのである。やがて光（電磁波）から素粒子、原子、分子、天体が生じた。その中から水の惑星である地球が誕生し、地球上に藻類、アメーバから始めて、次第に高次の植物、動物が現れ、最後に、人間が登場したのであった。すなわち、創造は人間を目指してなされたのである。

⁵⁴ ジェリー・A・コイン『進化のなぜを解明する』136。

① ログスの形成



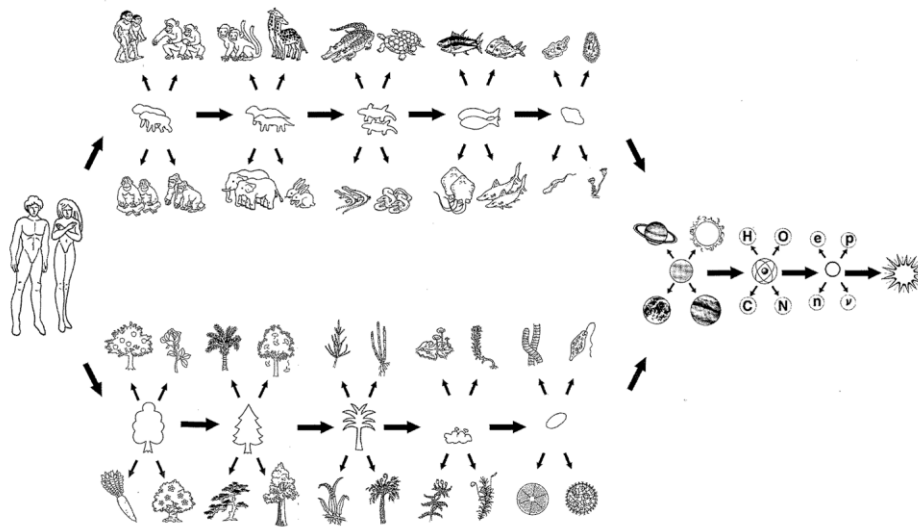
② 被造世界の創造



創造の二段構造

さらにログスの形成を詳細に見ると、そこには捨象のほかに、変形のプロセスがあったのである。すなわち、神は人間（アダム・エバ）の表象を標本として、それを捨象のみならず、変形しながら、高級なものから低級なものへと動物、植物の表象を描いていったのである。変形するとは、動物の場合、鼻を伸ばしたり（ゾウ）、首を伸ばしたり（キリン）、耳を伸ばしたもの（ウサギ）などを構想することであり、植物の場合、花を強調したり（バラ）、果実を強調したり（リンゴ）、木を強調したもの（杉）などを構想するということである。

以下の図において、右向きの矢印は捨象（単純化）を示しており、四方向に向けた矢印は変形を示している。実際は四方向だけでなく、数多くの変形があったのであるが、ここでは四方向だけを示しているのである。



ロゴスの形成のプロセス

このような統一思想の創造論の観点から見れば、人間は万物の総合実体相であって、したがって人間は生物の要素を総合した形で持っているのである。他方、万物は人間の持っている要素を捨象（単純化）、変形して持っているのである。そのために、動物の遺伝子は人間の遺伝子を削ったり、変形した形になっているのであり、人間の遺伝子は動物の遺伝子を寄せ集めて合成した形になっているのである。

尾に関して言えば、四足で地面に平行に走る動物や空を飛ぶ鳥が、安定して走ったり飛んだりするためには尾が必要なので、それらの動物を構想するに際して、人間の背骨を伸ばして尾がつけられたのであるが、直立歩行する人間には尾は必要ないので、人間の背骨の下は動物の尾を圧縮した形になっているのである。またウサギには周囲を警戒するために長く動く耳がつけられたが、人間にはそのような耳は必要ないので、動耳かく筋は消去または圧縮した形になっているのである。虫垂に関しても同様である。すなわち、動物において変形したものを、人間において元に戻したということであって、これは痕跡器官と言うべきものではないのである。

偽遺伝子に関しては、長い尾、長く動く耳、長い首、長い鼻など、動物には、そのような変形に必要な遺伝子が注入されたのであるが、人間においては必要のない器官であったために、それら動物の変形に注入された遺伝子が消去されたものと理解される。

ヒトのゲノムに原人や類人猿と共通性が見られるのも、原人や類人猿がヒトをモデルにして、ヒトのゲノムを捨象・変形した姿で造られているから当然のことである。

隔世遺伝に関しては、圧縮あるいは消去された遺伝子が偶発的に蘇ったものと理解

される。

発生反復説に関しては、ヒトの胎児の成長が、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類の胚の発生のモデルになっているのであり、進化ではなくて、人間をモデルにした創造であることを示しているのである。

(2) 万物の霊長である人間

1. 人間の脳にある文法、構文

人間の脳は超精密な器官であり、脳をコンピューターに例えれば、人間の脳には、動物の脳には見られない構文や文法のハードやソフトが組み込まれているのである。

ノーム・チョムスキー(Noam Chomsky)やスティーヴン・ピンカー(Steven Pinker)などの言語学者は、「記号言語の使用もおそらく遺伝的な適応で、人間の脳には構文や文法がどういうわけか組み込まれているのだ」と言う⁵⁵。

ユージン・E・ハリスによれば、「言語の使用は現生人類に特有の行動であって、最近になってようやく獲得されたのだとする説によれば、言語に必要な神経のしくみは、現生人類の進化の途中で独立に起こった遺伝的变化によって生まれたということになる。しかし、現時点ではこの説はかなりあやふやなものと言うしかない。とくに、言語のもととなっている遺伝子が何個あって、ゲノムの中のどこに位置しているかについては、ほとんどわかっていない⁵⁶」のである。

結局、言語に必要な構文や文法は、なぜ人間の脳に組み込まれているのか、進化では説明できず、謎のままである。

2. チンパンジーは言語を操れない。

ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチューによれば、「動物に言語を教えようとしたさまざまな試みがどれもうまくいかなかった⁵⁷」のであり、手話の学習に関する研究プロジェクトにおいても、「ニム(チンパンジーの名前)はシンタクス(構文論)の証拠ももたらさなければ、形容詞を名詞につけることすらしていなかった⁵⁸」のである。

チンパンジーは目に見えるもの、肉体的な欲求に関するものにたいしては、工夫することができるが、言語を操ることは全くできないのである。

3. 観念・概念を総合する人間

⁵⁵ ジェリー・A・コイン『進化のなぜを解明する』396。

⁵⁶ ユージン・E・ハリス『ゲノム革命』174。

⁵⁷ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュー『新・進化論：自然淘汰では説明できない』134。

⁵⁸ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュー『新・進化論：自然淘汰では説明できない』135。

人間の心には、知情意の機能と、心の中に思い浮かべる観念や概念等のイメージがある。そして知の理性に基づいて、観念や概念を連合・複合させながら、たえず新たな構想を描くことができるのである。ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュューは、そのことを次のように述べている。

自然界の生物のなかでは、われわれ人間が完全な意味での作用力を享受している。われわれ人間は、望みとあらば別の目標で代用できることを知りながら、特定の動作の目標を自分自身に提案し、その目標を実現するための適切な手段を自由に選択する。われわれは動作を起こす前に、考えられるさまざまな結果を心の中に思い浮かべ、それにしたがって決定を下す。理解力を備えているおかげで、われわれは自分が作用を及ぼす主体者であることを熟知している。理解力がその人の動作を再考し、その動作そのものを理解することができるからである。選択を行なう能力である意志は、他の能力を作動させるわけであり、いちばんの主体者である⁵⁹。

元城西国際大学経営情報学部教授の望月清文は、人間には概念的なイメージを構築する能力があると言い、それは哲学者、中村雄二郎の言う“共通感覚”のはたらきによるものだと言う。望月は、次のように述べている。

それ[共通感覚]は、五感や直感など、いくつかの感覚を通して入ってくる諸々のものを統合させて、一つの概念的イメージを構築する能力である。言葉によるコミュニケーションにしても、そこでは、相互に係わりのない言葉の並びから、全体で一つとなるイメージが作り上げられているし、機械にしても、個々別々な部品の集積が一つの機能を生み出しているが、それらを可能にさせているのは、人間の抱く概念世界において全体を一つに統合する共通感覚の存在である。……この共通感覚こそ、人間を人間たらしめているもっとも基本的なものであり、まさに人間性の心の大地と呼べるものである⁶⁰。

望月は、さらに人間には、各民族の言語の違いを超えたイメージの鑄型があるという。これは統一思想で言う、心の中の“原型”に相当するものである。望月清文によれば：

要するにイメージの鑄型が心の基盤にあつて、どんな言語であれ、どんな言葉であれ、同じイメージの鑄型を持つ人には、言語や言葉に左右されない、似たようなイメージが創出されるということである。共通感覚の誕生は、人類に概念の世界というそれま

⁵⁹ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュュー『新・進化論：自然淘汰では説明できない』147。

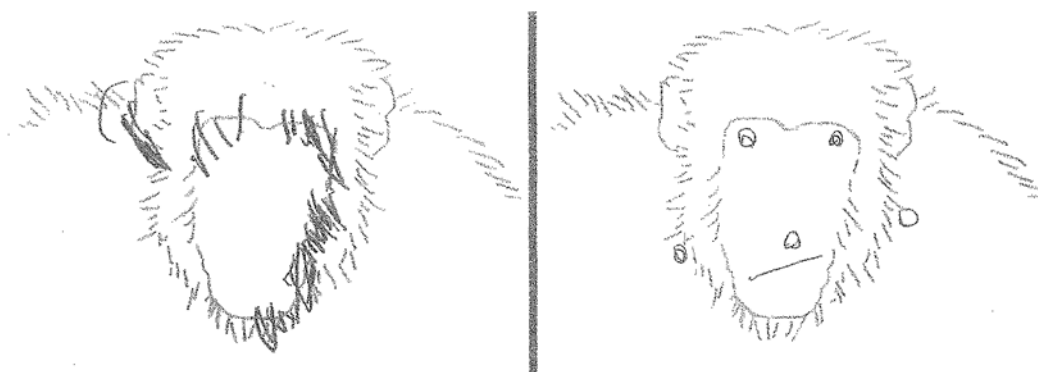
⁶⁰ 望月清文『素粒子の心、細胞の心、アリの心』94。

での生物にはなかった新しい世界をもたらしたのであり、それは、まさに新しい種の誕生、現代人の心を持った新たな種としての新人誕生に他ならない⁶¹。

京都大霊長類研究所の松沢哲郎と中部学院大、滋賀県立大のグループは、人間の子供とチンパンジーを比較する研究で、想像をもとに絵を描けるのは人間だけだったという結果を発表した。

1～3歳の子供約60人と、チンパンジー6頭に絵を描かせる実験を行い、結果を分析。……目や鼻のない猿の顔を見せたところ、欠けた部分を補って描き入れることができたのは、人間の子供だけだった⁶²。

輪郭だけが描かれたチンパンジーの顔にチンパンジーが描いた絵。右は人の子供が目や口などを描き足した絵（京都大、滋賀県立大提供）



この研究は、人間には、観念・概念を総合する能力があり、内在するイメージ（原型）を思い浮かべることができるが、チンパンジーにはそのような能力はなく、今そこにあるものを思い浮かべることができないことを示しているのである。

4.倫理のある人間

ダーウィンは「人間と下等な動物の違いのなかでも、もっとも重要なのは倫理感あるいは良心である」と言い、良心について、「これは短いが決定的な言葉、“ねばならぬ”でいい尽くされている」と定義した。“ねばならぬ”とは「規範」または「戒め」であり、人間社会において、道徳や倫理と呼ばれるものである。ところが彼は、道徳や倫理がいか

⁶¹望月清文『素粒子の心、細胞の心、アリの心』118-19。

⁶²産経新聞、2014.10.28。

して成立したのか説明できないまま、ただ進化によって生じたと主張するだけだった。それにたいしてダーウィンの進化論を強力に擁護して「ダーウィンのブルドック」と呼ばれたハクスリー (Thomas Henry Huxley) は、道徳や倫理は進化によって説明されるものではないということを認めた。そして彼は、道徳や倫理は進化とは別の原理によって説明されなくてはならないと言ったが、その起源を明らかにすることはできなかった。

イギリスの発生物学者であるウォディントン(C.H.Waddington, 1905-1975)は、「人間以外の動物世界では、進化のプロセス自体になんら倫理的資質があると思えない。……人間だけがひとり倫理化する存在であり、倫理を求めるのだ⁶³」と言いながら、生物進化の立場から人間がいかにして動物的存在から倫理的存在になったかを論じた。そして彼は、人間社会における権威システムの発達が倫理体系の樹立を導いたと言い、進化の目指すところは豊かな生であるといった。しかしそれでは動物には倫理はなく、人間だけが倫理的な存在となったという説明にはならない。動物世界にも権威システムはあり、動物たちも豊かな生を求めているからである。結局、生物的進化から人間の倫理性を説明することはできないのである。

その後、倫理を進化論の立場から語ろうとする「進化倫理学」が論じられるようになった。しかし、実際に人間の倫理を生物的進化から明確に説明できていない。ダーウィニズムでは決して道徳や倫理を保証することはできないのである。

5. 霊性を持つ人間

①5 万年前の文化のビッグバン

1978 年に行われた、ハワイ大学のレベッカ・キャン (Rebecca Cann) らによるミトコンドリアDNAの変異の研究により、現代人のミトコンドリアDNAの持っている変異は、20 万年前にアフリカにいた一人の女性 (ミトコンドリア・イヴと呼ばれた) のミトコンドリアDNAに由来するという結論に達したのであった。さらにその後に行われたY染色体分析によると、ミトコンドリア・イヴに相対する男性「アフリカン・アダム」が20万～5万年前にアフリカに存在していたという⁶⁴。Y染色体は男性だけを通じて遺伝されるものである。したがって、20万年前から5万年前の間に現代人とほぼ同じ肉体をもった肉体としてのヒト (ホモ・サピエンス) が登場したといえよう。

そして5万年前、「人類の文化の曙」、「創造的爆発」、「偉大なる飛躍」、「社会的ビッグバン」⁶⁵ともいふべき、人類の夜明けが始まったのである。フランスのショーヴェ洞窟の壁画は、「先史時代のレオナルド・ダ・ヴィンチのような芸術家」⁶⁶が描いた、見事なものである。ニューヨーク大学のランドール・ホワイトによれば、彼らは「神経機能面の能力

⁶³ C.H.ウォディントン、内田美恵他訳『エチカル・アニマル』工作舎、1980年、149頁。

⁶⁴ リチャード・G・クライン、ブレイク・エドガー著、鈴木淑美訳『5万年前に人類に何が起きたか?』新書館、2004年、199頁。

⁶⁵ 同上、286頁。

⁶⁶ 同上、282頁。

としては月に行ける状態にあった」⁶⁷である。

文化の曙によってレオナルド・ダ・ヴィンチのような芸術家が現れたこと、彼らは月に行けるほどの知的な可能性を持っていたということは、何を意味するのであろうか。彼らは単に肉体だけの存在ではありえないことを意味している。

したがって統一思想の立場から見ると、20 万年前～5 万年前のある時点で、肉体としてのヒトが造られ、およそ5 万年前に、霊を吹きこまれた人間、すなわちアダムとエバが創造されたと見ることができよう。

② 内なる人間としての霊人体

神経科学者のジョン・エックルス(John Eccles)は、意識的な経験は、神経組織の中で進行しているが、神経組織とは別次元のものであると述べている⁶⁸。そして次のように結論した。「唯物論者の答では、われわれが経験してきた特異性は説明できないので、われわれの魂の特異性については超自然的な精神創造のせいとするしかない。神学的な説明をすればこうなる。すなわち、個々の魂は、受精から出産までのあいだのある時点で発育中の胎児に〈付与〉される、神の新たなる創造物なのである。⁶⁹」

ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチューは、物理的自然の領域は、人間と人間の心とによって完成されるという。すなわち、神は人間を万物の霊長にせしめたというのである。

人間においてはじめて、自然は己を知ることができる。自然が芸術作品のようなものならば、それは心が熟考の対象とすべきものであり、創造者である〈大いなる心〉そのものではない。自然の創造者は、そこにその心と仕事を反映させるだけでなく、それを観察する者すなわち人間も必要とする。つまり、物理的自然の領域は、人間と人間の心とによって完成されるのだ。人間以後の一步は、自然界の等級を完全に越えたものとなるはずで、一部なりとも進化の産物ではありえないだろう⁷⁰。

そして、「視覚の経路をいくら深く探ろうとも、最後は、知覚の対象に視覚的な像を伝達する『内なる人間』が存在すると仮定する必要がある⁷¹」と言う。われわれは内なる人間

⁶⁷ カール・ジンマー、渡辺政隆訳『進化大全』光文社、2004年、410頁。

⁶⁸ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュー『新・進化論：自然淘汰では説明できない』89。

⁶⁹ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュー『新・進化論：自然淘汰では説明できない』374-75。

⁷⁰ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュー『新・進化論：自然淘汰では説明できない』378。

⁷¹ ロバート・オークローズ、ジョージ・スタンチュー『新・進化論：自然淘汰では説明で

としての霊人体、そして万物の霊長としての人間を認めなくてはならないのである。

V. 雌雄の愛の過程を通じた創造

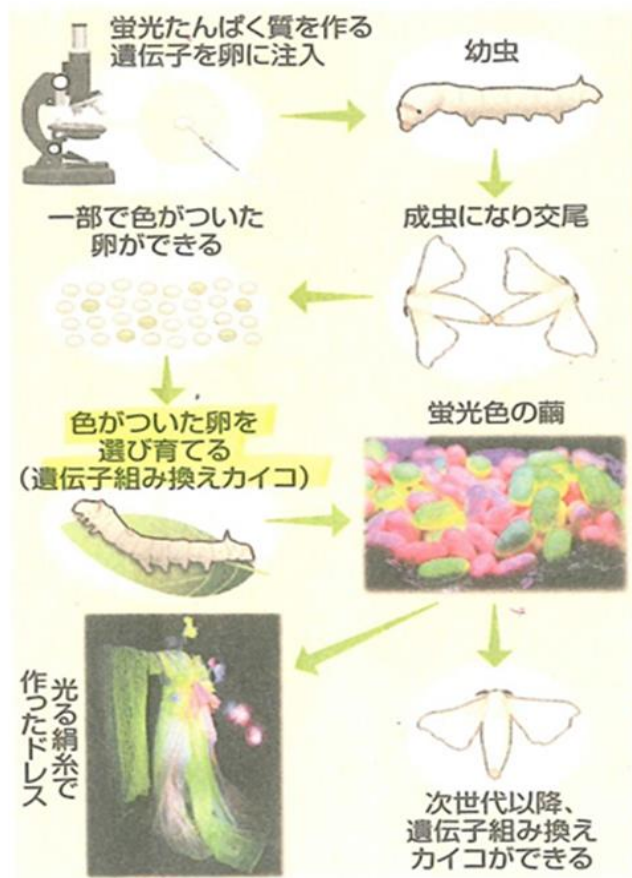
ダーウィンは『種の起原』の「自然選択」の章で「自然淘汰は、日々刻々と世界中でわずかな変異を精査している。悪い変異は取り除き、良い変異はすべて保存して蓄積しながら、機会さえあればいついかなる場所であろうとも、それとわからないように黙々と、有機的および無機的な生活条件について個々の生物の改良にあたっている」と述べた。

しかし、選んだ変異をどのようにして子孫に伝えるのであろうか。首が伸びたり、耳が伸びたりしても、体細胞の変化はそのまま子孫には伝わらないのである。

ここで茨城県つくば市の農業生物研究所が開発した、光る絹糸を作る、カイコの遺伝子組み換えの例を見てみよう。それは次のようにしてなされたのだという。すなわち、「カイコの卵のうち、精子や卵子の元になる細胞（始原生殖細胞）だけに蛍光遺伝子を注入。この卵から育った、蛍光遺伝子が組み込まれた精子と卵子を持つ成虫を交尾させ、全身に蛍光遺伝子が組み込まれたカイコを作った⁷²」のである。

きない』85。

⁷² 2014.8.28. 夕刊読売新聞



カイコの遺伝子組み換え

結局、生殖細胞、それも精子と卵子の元になる始原生殖細胞において、遺伝子の組み換えがなされることによって、光る絹糸を作るカイコができたのである。

望月は「既存の生物の生殖細胞に新たな統合力が働きかけることで、その中にあった既存のゲノムが、新たな統合力のもとで新たなゲノムへと再編され、そうして出来上がった生殖細胞によって、新たな種が誕生してきているのかもしれない⁷³」と述べている。ここで、新たな統合力とは、ロゴスであり、生命の波動であると理解される。

発生学者、団まりなは、「始原生殖細胞は次世代の個体のもの」であって、次世代につながるのは、体細胞でなくて、始原生殖細胞であると述べていた。

生殖細胞はなぜほかの細胞とは別扱いされなければならないのか。この疑問に答えてくれる実験事実は存在しない。したがって、推測するほかない。私の推測は、次のようなものである。始原生殖細胞は、胚の細胞ではない。始原生殖細胞は次世代の個体のものであり、それを生み出す胚の一部であってはならない⁷⁴。

⁷³ 望月清文『素粒子の心、細胞の心、アリの心』157。

⁷⁴ 望月清文『素粒子の心、細胞の心、アリの心』157。

従って神の創造においても、始原生殖細胞において、遺伝子組み換えが行われることによって、新たな種がつけられたと理解できるのである。文鮮明師も、生物は「雌と雄が愛の過程を通過して発展した」と、次のように述べている。

今日、一般の人たちは、人間は進化し、発展したのだと信じている。しかし、どんな動植物を見ても、片方の雌だけで発展してきたのではなく、[片方の雄だけで発展してきたのではなく]、雌と雄が共に作用して発展したのがある。また、低級なものから高級なものまで、繁殖し発展するためには、雌と雄が愛の過程を通過しなければならない。でなければ、発展はありえない。猿の骨を調べて、構成や形態や構造などが人間の骨格と同じだといっているが、だからといって猿が人間になったというのであろうか⁷⁵。

進化論では生存に適したものが生き残るというようにして、進化したと言う。しかし首の長いものが有利だからといって、オカピのようなキリンの先祖型の動物の首が伸びて、キリンに進化するわけではない。体細胞の変化が子孫に伝わるのではないからである。また雄だけ進化しても、雌だけ進化しても、その変異は子孫につながらないのである。したがってオスとメスが交わる愛の過程において、神の創造力である第三の力（宇宙的な力）が作用して、精子や卵子の元になる細胞（始原生殖細胞）に新たな遺伝子が注入されなければならない。すなわち雄と雌の愛の過程を通じて新しい種が生まれてくるのである。神はそのようにして、次第に愛のレベルを高めながら、種類に従って万物を創造されたのであった。これを愛の前進と言う。すなわち神の創造は、愛の階段を上昇しながら、人間における愛の完成を目指して創造がなされたのである。

ここでホーマー・ダンカンの言葉に耳を傾けてみよう。

創造と進化との戦いは、きれいごとのゲームではない。単に他方が間違っていると立証するだけの事柄でもない。創造と進化との戦いは、神とサタンとの大規模な戦いの一部分として重大なものである。人間の心と魂をかけた戦いなのだ。⁷⁶

進化論によって、神は創造主の位置から追われて、それに代わって自然選択が創造主の位置に立っている。そして神は囹圄の身となり、身動きできなくなっているのである。今こそわれわれは、進化論を克服して、神を解放し、本来の位置に戻してあげなければな

⁷⁵ 文鮮明『文鮮明師と新ソ連革命』49。

⁷⁶ ホーマー・ダンカン、佐藤是伸訳『進化論—その盲点をつく—』いのちのことば社、1981年、97頁。

らない。そして神が本来の位置に立たれるとき、神の創造理想であり、人類が切に願ってきた理想世界である、エデンの花園が実現されるようになるのである。